
無能の魔具使い

真光 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能の魔具使い

【Zコード】

Z0033X

【作者名】

真光 勇太

【あらすじ】

「魔力はすべての人間に備わっている」そんなことが当たり前の世界に、一人の無能の能力者が居た。両親から与えられるはずだった魔具、両親そのもの、その両方を持っていなかつた彼にある日、大きな転機が訪れた。

?魔具と無能（前書き）

この物語はファイクションです。

?魔具と無能

魔具。

それは単純に言つと魔力を込められて作られた神具の類のものだ。このように説明すると今度は”神具”とは何かと尋ねられるかもしれない。

それが最初に発見されたのは、とある宗教団体が世界に反逆して起こした第一次魔神戦争のときだ。

ちなみに”魔神”は、魔具と神具の略だから、勘違いしないでくれよな。

その宗教団体はわずか100万人という数であつたにもかかわらず、世界の大國をことごとく潰していった。

いや、正確には「従わせていった」と言つた方がいいかも知れない。

その時に用いられたのが”神具”と呼ばれるものだ。

その時の記述によると「神具とは神通力を込めて作られたもの」と書かれているが、正直なところは俺たちにはわからない。

ただ、その武器を使って一時的にこの世界を牛耳ってしまったのがこの宗教団体だった、ということは紛れもない事実だ。

そこで、その時に小国でいまだに潰されていなかつたある国が密かに研究を重ねていたものがあった。

それは”魔力”と呼ばれるものだ。

「魔力は全ての人間に備わっている」

それは今この世界に存在する人ならだれでも知つてゐる事実だ。だがそれが初めて発見されたのが、その時、その小国、”日本”でだつた。

日本は魔力を発見するとすぐに他の国々と連携を取つてある武器の製作に臨んだ。

その武器と言つのが”魔具”である。

そしてそれを用いて戦つたことによって見事にこの世界が救われていったのである。

.....

「よし、じゃあ今日の授業はここまでだ」

俺たちの日の前に立っていた教員がそう告げると同時に授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

教員は歴史の授業を終え、教室から退室して行つた。

「ふう……。やっと終わつたか」

俺は授業で使つていた教材を机の横にぶら下がつていたカバンに片付けてそのまま机に突つ伏した。

「あ～だりい」

俺がだらだらとしていると、俺の左斜め後方から声が聞こえてきた。

「こりゃ、授業が終わつたらすぐにそうちだらけでー！」

俺の安眠を妨害しに来たこのいかにも生意氣そう……生意氣な女は、日向咲ひなたさき、一応俺の幼馴染まどうすずむだ。

ちなみに俺は魔道進まとうすすむ。

「あ？ 別にいいだろ、”休み”時間なんだから」

「う……た、確かにそうだけど」

おまけに頭がちつとばかり弱い。

勉強は出来るやつなのにな。

「な、なんかわつきからひどい」と言われてる気がする……

「気のせいだ」

幼馴染はみんなそんなのかわからないが、こいつは時々何となく俺の考へてることがわかるみたいだ。

付き合いが長いからなのだろうか。

「そ、そうじゃなくて、次は魔具の訓練の実習でしょ？だから、着替えて外に出ないと」

「あ……。そういうば、そうだつたな……」

俺は周りを見渡した。

すでにみんな出て行っていたようで、周りには誰もいなかつた。

「た、確かに嫌かもしれないけど……た、一応授業なんだから……」

「……別に、サボるつもりだつたわけじゃねえよ」

「そ、そり……」

さつきまでの強気はどこにいったのやら、この話題になるとこ

つはいつも遠慮がちになるのだ。

俺は更衣室に向かうために立ちあがつた。

「おい、お前も早く着替えに行けよ」

「う、うん」

俺の発言に頷くものの一向に咲は動こうとしない。

仕方ないから、咲が絶対に動けるようになる言葉を俺は言った。

「もしかして……一緒に着替えたいのか？」

咲は一瞬ポカンとしていたが、俺の言葉の意味するところを理解すると、急に顔を真っ赤にした。

「は……な、な……し、死ねえ……！」

俺にそう反論して、体操着を持つて更衣室に走つて行つた。

あいつはああいうところがやたらとうぶなのだ。

そこだけは少しだけ可愛いかもしれない。

「……なんてな」

俺はカバンの中から体操着を取り出し、ゆっくりと深呼吸をした。

「さて……と、そろそろ俺も行くか」

俺は今度こそちゃんと更衣室へ向かつて行つた。

.....

「それじゃあ魔具の訓練を行つぞ」

俺たちは今、学内の特別施設にいた。

魔具を使用する授業は危険なため、どこでも練習していいわけではないのだ。

被害が最小限に抑えられるよう、特別な作りになつてあるこの場所でのみ使用していいことになっている。

教官はさつきのセリフの後、生徒を実力順に分けて、どんどんとペアを組ませていっていた。

ちなみに、この授業だけは男女混合で行われている。

魔力の量が一人一人違うのは確かなんだが、男女で差があるわけではないからだ。

俺がそんなことを考えていると、教官は俺の前に来た。

「次は、お前か……。お前は、そうだな……あいつにでも……」

教官が誰かを指さそうとした時、前方で誰かが手を上げていた。

「は、はい！ 教官！ 私にやらせて下さい…」

そのいかにも馬鹿な提案をしている女の子を俺と教官は同時に見た。

……咲だった。

「またお前か……。だがな、お前がこいつとやつても、あまり意味が……」

「あります！」

が……」

咲は教官がセリフを言いきる前に間髪をあけずにそう言った。

教官は咲のまっすぐな視線を見、少し思案している様子だった。

咲も視線を一切そらさない。

「……わかった。なら、お前がやれ。ただし、手は抜くなよ

「はい！」

そう言つて、立ち去つて行つた。

俺としたらどちらにしても複雑な気持ちだ。

これで、咲のこの授業が無駄になる。

「おい、咲……」

「何?」

「お前……」
「んなことしていいのかよ?」

「何が?」

「何がって……。

そんなのわかりきつてることだな。

「……俺が、魔具を持つていなければ……」

俺はさつきまでとは違い、ひとりわ大きな声で叫んだ。
周りにいたやつらも、その声に驚いたみたいだ。

「そんなの……関係ないよ」

「関係ないことないだろ? こんななんじゃ、お前の練習にならねえ
じゃねえか。お前はせっかくクラスでトップの実力があるのに……」

「だから?」

「だから……って。

わからないわけがないだろ。

「だから、お前の足を引っ張るなんてこと俺が……」

バシッ。

咲が俺の頬をビンタした……わけではなく、俺の足元に突如現れた樹の根が鞭のようにしなり、地面を叩いた。

「へ?」

俺は何が起きたのかわからず、ゆっくりと咲の方を向いた。
咲の手には、緑の水晶のようなものが入った指輪がつけられていた。

た。

咲の魔具だ。

「別に、そんなことにはならないよ。さつき教室にも言われてたで
しょ、手は抜くなつて。……と言つことで、逃げてね?」

そう言つと、人工の施設の中に、存在するはずのない樹の根のよ
うなものが何本も出てきた。

「マジで?」

「マジで」

そういうと同時に、いっさきに大量にある樹が俺をめがけて襲いかかってきた。

俺はそれをバツクステップでよけると、ダッシュで逃げだした。

「マジかよ！　お前、それあたつたらシャレにならないぞ！」

「大丈夫だよ。さつき言ったみたいに……死ぬ、まではしないから

へ？」

さつきて何だ？

さつき、さつき…………あ。

もしかしてあいつ、さつき俺が教室で言つた「冗談の事言つてるのか？」

「は？　あ、あんなの[冗談に決まってるじゃねえか！　本気にするんじゃねえよ！」

俺は迫りくる樹の根をジャンプしたり、かがんだりを繰り返し、よけながら叫んでいた。

咲は、そんなことは関係ないとでも言つよう、「どんどんと追い打ちを掛けてくる。

「別に、信じたわけじゃないけど……。でも、なんかむかついたの！」

そんな、理不尽な！？

つてなこと考えてる場合じゃねえな。

とにかく、今は咲を落ち着かせねえと。

「お前なあ……。だいたい、俺がお前の裸なんて見たって何のメリットが……」

ピキッ。

俺がセリフを言いきる前に何かが割れる音が聞こえた……ような気がした。

俺はとつせに思った。

あ、やべ……

「あ、なんだ。なんもメリットないんだ……。じゃあ、もう生きてても仕方ないね……。バイバイ、進ちゃん^{しん}」

そう言つと、何本かに別れていた樹の根が突然一つにまとまり出し、一本の大樹のような大きさになつた。

俺は避けようと思ったが、いつの間にか隅に追い込まれていたらしく身動きが取れなかつた。

「バイバイつて……やっぱ死ぬのは俺の方なんだな？」

明らかに死ぬのは女の方のようなセリフを言つていたのに。

もはや、俺のセリフに何も返事をせず、静かに俺にその”鞭”を振りおろした。

？驚愕と困惑

俺は気がつくと医務室のベッドで寝ていた。
周りを見渡しても誰もおりず、ベッドの横にはただ牛乳とパンが置かれているだけだつた。

「あれ……俺、どうしたんだっけ？」

俺はここに運ばれてくる前の記憶を呼び覚ます。
確か、魔具の実技をしてて……。

そう考えていると、しだいに記憶が鮮明になつていった。
あ、そうか。

咲に……ボコボコにやられたんだな。

俺は身体のだるさを感じ、叩かれたところを見た。

「…………あれ？」

さつきの樹の根のようなものがカスつてついたちょっとした傷は確かにあるんだが……

「何で最後のやつの怪我がないんだ？」

俺は不思議に思い、ゆっくりと立ち上がつた。

その時、丁度病室に誰かが近づいてきた。

その人は部屋の前で少しためらつた後、ゆっくりと入ってきた。

「ノックぐらいしろよ」

俺がそう言うと、入ってきた人……咲は何かを言おうとしたが一度引っ込め、その後ゆっくりと深呼吸してから言った。

「カーテンだから……ノック出来ないじやん」

「まあな。で、どしたんだ？」

「どうしたつて……。心配で来たに決まつてるじやん

「そつか。ありが……じゃないな。ってか咲、お前あれはいくらなんでもやりすぎだぞ。俺、マジで死ぬかと思つたし」

「あれは……」「めん、ちょっと反省してる」

俺が言つたことにもつと文句を言つてくるかと思つたが、妙にし

ゆんとしているので、俺も少し申し訳なくなってきた。

「いや、まあ俺も悪かつたしな……。そういえばさあ、俺、最後の”やつ”くらったよな？ 傷が全く見当たらんんだけど？」

俺がそう言つと、咲は驚くべきことを言つた。

「いや、へりつてないよ。最後のは、進ちゃんが防いだじゃない？」

「は？」

俺は咲が今何を言つたのかわからず、思わず聞き返していた。

「防いだ？ 俺が？」

「うん……本当に覚えていないの？」

咲はそう言つと、その時のことと詳細に教えてくれた。
俺は最後に死を覚悟した後、両腕でその”鞭”を防げりとした。
……もちろん、意味などないと思いながら。
ただの反射のようなものだ。

だけど俺の腕と”鞭”が当たった瞬間、魔力の衝突のような衝撃波を出した後、”鞭”の方が弾かれて消えたらしい。
そして、その後急に俺が倒れた。
んで、今に至るらしい。

「マジで？ 俺、何もした覚えないけど……」

「そうなの……。まあ、進ちゃんならこれくらいのことはいつかすると思つていたけどね」

そう言つて、嬉しそうな、寂しそうな、よくわからない表情を咲はしていた。

「それは……買いかぶりすぎだろ」「

「そんなことないよ！ 進ちゃん運動能力の入試トップだったし、入った時に測つた潜在魔力量だって、ダントツだったし……」
確かに、そんな過去もあった。

「だけどな……」

「そんなの、魔具が無いんならあつてもなくとも一緒だろ？」

「それは……」

俺の答えに納得していないのか少し考えた後、そのまま続けた。

「でも、咲の意味があつたじゃない」

「それは……でも、本当に覚えてないしなあ……」

俺はそう思い考えようとしたが、すぐに無駄だと判断し、ベッドの横に置いてあつたパンと牛乳を指さして言つた。

「そう言えば、これは咲が用意してくれたのか？」

「へ？ 進ちゃんが自分で買つてきたんじゃないの？」

「いや、全然」

こいつが用意してくれたんじゃないとしたら後は……誰だ？

俺は記憶の中で用意してくれそうな人を想像するが、誰にも思い当たらない。

まあ、とにかく誰かからの好意だと思つて、とりあえず食べようと思い、そのパンに手を伸ばした。

「あ……」

俺がパンを手に取つたと同時に、咲は変な声を出した。

「どうかしたのか？」

「いや、誰が用意したかもわからないのに、食べるのかな？ と思つて……」

俺は手に持つたパンを見た後、医務室に掛けられていた時計を見た。

時間は1時に一度なつたところだった。

「ああ、たぶん誰かさんからの好意だと想つて、それに時間ももうあまりないしな」

俺がそう言つと、咲が少し訝しげな顔をした。
いぶか

「午後の授業出るの？」

「ああ、一応な」

俺は咲の表情を気にせず、それだけ答えた後パンをこつこつ食べ始めた。

そして、横に置いてあつた牛乳も一息に飲み干した。

「ふはあ……よし、行くぞ」

俺がそう言つと咲が苦笑いをしながら言つた。

「はあ……もう、しようがないなあ～」

俺たちは会話をそこで終えると、部屋を出て行った。

……そつ言えば、咲が身体の後ろに何かを隠していたな。

放課後。

周りの連中はクラブ活動に行く準備をしたり、遊びの約束をした
りとわいわいと騒いでいた。

俺は午後の授業を通常通り済ませ、もつやることが無かつたので
帰る準備をしていた。

すると、知らない女の子が俺の背後に立ち、肩を指で2回叩いて
来た。

「とんとん」

「…………」

?

俺が返事をせずにいると、不思議に思つたらしく、もう一度肩を
叩いてきた。

「とんとん」

「いや、まず初めに一応念のためツッココンでおくんだが、なんで、
とんとん、という音を声に出すんだ?」

俺がそう尋ねると、その女の子は単調な声のトーンで言った。

「そっちの方が可愛いから?」

「いや、疑問形で言われてもな……」

俺はなんだかそれ以上もうツッコむ気にならず、本来の反応に戻
ることにした。

「で、何か用か?」

「あなたに用がある…………らしいです」

「いや、らしい、つて……」

「そう、上の人と言われた」

上の人？

上の人、上の人。

……ああ、教官の事か。

「で、何て？」

「E209まで出来る限りすぐに来い……らしいです」

「了解、ありがとな」

「いえ」

俺に用を済ませたのに満足したのか、その子は頷いた後、教室をもう出ようとしていた。

「あ、君の名前は？」

そこで急に俺はとつさに名前を聞いていなかつた事を思い出し、そう尋ねていた。

「？ それは、あなたに必要な情報ですか？」

「何言つてんだ、お前？ 必要かどうかとか関係ないだろ？ 俺は知りたいから尋ねてんだ」

俺がそう言つと、少し考える仕草をした後に答えた。

「冬月雪菜

「冬月か……。オーケー、覚えた。俺は、魔道進だ」「知つてる」

俺の答えに淡白に答えた後、踵を返してまた歩き出した。だが、教室を出る直前の所で再び止まり俺に向かつて言った。

「……パン、食べた？」

「へ？」

俺はその質問が意外だったので、正直驚いた。

「あれ、冬月がくれたのか？」

「……じょーしの命令だから」

「そつか……。とにかく、ありがとう」

俺がそう言つと、反対を向いたまま頷き、出て行つた。

俺は冬月が出ていくときに見えた髪飾りにしばし目を奪われていたが、すぐに我に返った。

咲が俺に話しかけてきたからだ。

「今……冬月さんよね？」

「お前、知ってるのか？」

「ええ。冬月雪菜。この学校じゃ有名よ」

「へえ～」

俺がそんな反応を示すと、何か気に入らなかつたのか、そのまま咲は話し続けた。

「あの子の噂、知らない？　か、可愛い顔してるから男どもがみんな近づいて行くんだけど、全員玉砕。それでついたあだ名が”ドライアイス冬月”」

ひどいネーミングセンスだな……。

「どうか、こいつがこんなに人を悪口っぽく言つるのは珍しいな。

「お前、あいつの事嫌いなのか？」

俺がそう質問すると、なぜか驚いた顔をした後、視線が宙を舞つていた。

「い、いや、そんなことないわよ。ただ、進ちゃんはそういうことになれてなさそうだし、あの子になびいて後で傷ついたら可哀そุดなとか思つちゃつたりしちゃつたりしちゃつたわけで」

なんか訳わかんない事言つてゐるな……。

まあいいか。

「了解。忠告だけ聞いとくよ。じゃあ、俺呼ばれてるから

「だ、誰にー？」

「誰つて……教官様だよ」

俺がそう答えると、なぜか安心したように息を吐いた。

「そ、そう。……じゃあ、行つてらっしゃい」

「ああ」

俺はそう答えた後、指定された場所に向かつて行つた。

着くと、すでに教官はいた。

……んだが、教官の隣にもう一人、いかにも偉そうな人がいた。
司令官のような風貌を思わせる人だつた。

「教官、今参りました」

俺がそう言うと、話し込んでいた会話が止まり、ゆっくりと二人同時に俺の方を向いた。

「おお、来たか。……こちらは、フェイト大佐だ。わざわざお前のためにこの学校に赴いてくれたのだ。ちゃんと挨拶しろよ」

俺は、”俺のため”、という部分に違和感を感じたが、言われた通りに挨拶することにした。

「ここにちは。私はこの学校の一回生の魔道進です。お会いできて光榮です、フェイト大佐」

「これはこれは。」丁寧にびっくりがとうございます。私は国立魔術局本部からきました、フェイトです。以後、お見知りおきを」
そう、丁寧に自己紹介をした後、彼は手を差し出してきた。

国立魔術局の本部から！？

俺は驚いたが、顔に出さないようにして、大佐にならい握手をした。

「君の噂は聞いてますよ」

「はあ……」

俺の噂つて……どんなことだろうな？

と思ったが、次の大佐の発言を聞いた瞬間、俺は一気にこの人に対する警戒心を高めた。

「絶滅したはずの”魔道”の性を持つ者としてね」

ドクンッと俺の心臓が一瞬鳴ったが、まだ相手が何をしたいのかわからない。

俺は胸中を悟られないように返答をした。

「そりゃ……どうも」

「君の魔力の量の数値も見せていただきましたが、やはりあなたが本物だと思って間違いなさそうですね」

「…………」

だから。

この人は……いつたい何がいいたいんだ？

確かに俺は”魔道”の性を持つが、魔具すら持つていらない出来損ないだぞ？

「いえいえ、そんなに肩に力を入れないでいただきたい。あなたの境遇の事もしつかりと理解しておりますから。今日はそのことも含めて相対的にあなたを判断させて頂こうと思い、来たのです」

判断？

「それは……」

俺が言葉を発しようとした時、唐突に教官が話に割り込んできた。
「さて、前置きはこのぐらいにして本題に入りましょうか」
そう言つと、俺と大佐を連れて、奥にある映像処理の部屋に向かつて行つた。

そしておもむろに機械を操作し、前方のスクリーンに映像が流れ始めた。

今日の俺と咲の試合だ。

大佐は初見だったのか、それを食い入るように見ていた。

そして、俺が咲の”鞭”に当たるシーンに差し掛かると突然

「ここで止めてください！ ここからはスロー再生でお願いします」と言つた。

そして、俺もまだ見ていなかつた、咲のいつ”鞭”を弾くシーンを初めて拝んだ。

「これは……」

俺も自分で見ていて衝撃的だつた。

”鞭”は確かに俺に向けて振り下ろされたのだ。

だが、衝突する寸前で咲の説明していた通りの現象が起こつてい

た。

しかも……

「これは、魔具を発動した時の光にとてもよく似ていますね」

俺が思つていたことを大佐は口に出していた。

「でも、俺は魔具なんて……」

「確かにそう伺つていましたね……。ここからは少し込み入つた話をさせて頂くので、少し失礼になるかもしれません、そこはご理解いただきたい」

俺は仕方がなく、無言で頷いた。

「あなたは子供の頃に教会で捨てられていたようですね。その時に、魔具のようなものは一切一緒におかれていなかつたのですね？」

「これは、俺が今までに何度も聞かれたかわからないほどの質問だ。」

「……はい、俺の捨てられていた箱の中には俺自身と、性と名の書かれた紙が一枚置かれていただけです」

そう。

たつたこれだけ。

拾つてください、や、或いはそれに類する言葉は一言も書かれていなかつたのだ。

しかも、名前だけでなく名字まで書いていくといつこうもよくわからなかつた。

「そうですか……ふむ」

そう言つと、大佐は何か引っかかることがあるのか、一人で何かをひたすら呟き始めた。

「これは、もしかすると……。いや、あまりに安直すぎる。だが……」

そうひとしきり思案した後、再び話し始めた。

「魔具の事はもう理解してますね？ 魔具は一人につつ、そしてその魔具一つにつつき発動できる大魔術もこれまた一つ」

「はい」

そう。

魔具とは自分の魔力をある一定の形にして外部に出す”パイプ”の役割だけでなく、ただ一つだけ、その魔具に見合った”大魔術”と呼ばれる技を使うことが出来る。

もちろん、これは使用する魔力の量が桁違いであるし、そもそも発現しない者だっているのだ。

普通の人はその大魔術ではなく、普通のちょっとした魔術を用地精いっぱいだ。

例えば炎と相性が比較的いい者は火の玉をとばす、というような。「……もちろん例外もあり、魔具を二つ持っている者や或いは一つで二つの魔術を使うことの出来る魔具もあるらしいのですが」

そう言って、少し薄ら笑いをした。

その時、俺は直感した。

この人はそのどちらか、或いはその両方を持つているのだと。だが、俺はそのことには触れないことにした。

正直、そんなことよりも俺にとっては聞かなくちゃいけないことが別にある気がしたのだ。

「それで……大佐は何をおっしゃりたいんですか？」

「要するに……ですね。世の中には例外がある、ということですよ」

「だから、それがどういう意味かがわからないんですよ」

俺はもう痺れを切らしていた。

「はあ……。あまり仮説は言いたくないのですが……」

そう前置きを置いた後、続けて言った。

「つまり、魔具を一つ或いは二つ持ち魔術を使うものがいる。……

だとすれば……魔具を”〇個”持ち魔術を使うものも存在するのではないか……とね」

「……？」

俺は大佐の言葉が理解できなかつた。

いや、理解しきれなかつた……と言つた方がいいかも知れない。

この世界では、魔術を使うには魔具が絶対的に必要だというのが共通のルールであり、ずっとそう教えられてきたのだ。

それが突然、必要ない……なんて。

「いえ、もちろんこれは私の仮説です。こんなものに信憑性などないですよ。ただ、過去の文献　というよりも神話ですがね　にはそういう者も存在した……というような記述が残されているものですから」

おそらく、第一次魔神戦争の頃の文献の事を言っているのだろう。確かに、そういうことが書かれていたような気がする。

ただそれも、おそらくそうだった、と言われているだけで証拠のないものなのだ。

「そんな……あり得ないです。確かに俺は魔道の性を持っていますが、それもどうだかわからないし。それに、魔術なんか一度だって使えたことが無いんですよ？」

「それはおそらく”使えなかつた”のではなく、”使い方がわからなかつた”のでしょうか。現在、そのような人間は世界に一人も確認されていませんからね」

そうひとしきり言い終えると、大佐はおもむろに胸ポケットから名刺を取り出した。

そして、それを俺に差し出す。

「とにかく、私はあなたに興味を持ちました。ここには私の連絡先が書いています。もし何かあれば、ここに連絡をして下さい」

「……はい」

俺も少し自分に対する不安があつたのか、素直にそれを受け取つてしまつた。

「それでは、私はそろそろお暇じゆまさせていただきます。本日はどうもありがとうございました、教官殿」

そう言つと、大佐は右手を胸に当て、恭しく礼をした。

「いえいえ、こちらこそわざわざ本部からの御足労ありがとうございました。また何かありましたら、ぜひ

教官もいつも俺たちに対峙する時とは打つて変わって、非常に恭しい態度で敬礼をした。

だが俺にはそんなことを気にしている暇はなかつた。さつき言われた事を考へることで必死だつたからだ。

本当に……そんなことが？

確かに俺は魔術を使いたいと何度も思つたことがある。世界には魔力を微量しか持たず魔具を使えない者も多く存在するが、俺の場合はその逆なのだ。

俺は魔力が足りないのではなく、使えるけど使う方法が無かつたのだ。

そのことで俺は他人から低くみられることがいつたい何度もあった事か。

それを克服できるかもしれないと言われ、靡^{なび}かないやつがこの世界にいるんだろうか？

俺はそんなことを考えていたが、隣にいた教官の怒鳴り声にハッとした。

「おい、お前もさつさと大佐に礼を言わんか！」

「あ……た、大佐、わざわざ御足労ありがとうございました。その、また何がありましたら、よろしくお願ひします」

俺の返事にほほ笑んだ後、踵を返して歩いて行つた。

だが、出る直前の所で再びこちらを向きなおして言った。

「ああ、そうそう。その名刺に私の研究室の住所を入れておきました。もし、あなたが望むのなら私の研究室に向かい入れてあげましょ……ただ、研究室と言つても実戦訓練がメインであることはご理解いただきたい」

「はい。で、でも、それは……」

それは、正直願つてもないことだ。

だが今は返事をすることをしなかつた。

いや、出来なかつた。

「何も今すぐにと言つてるわけではありません。よく考えて決断してください。あなたがここにいて意味があるのか、とね。……それでは、今度こそ本当に」

そう言つてもう一度礼をした後、出て行つてしまつた。
ここにいて意味があるのか……か。

俺はその言葉を反芻した後、虚ろな感じで教官に礼をし、部屋から出で行つた。

?告白と決意

俺は虚ろなまま教室に戻つて来ていた。

あれ……

帰るつもりだったのにな……

そんなことを考えながらドアをゆっくりと開けた。中には人が一人だけいた。

咲だつた。

咲は俺に気付くと、笑顔になつて手を振ってきた。

「あ、進ちゃん！ どうだつた？」

「…………」

俺は返事をする氣になれず、黙つたまま自分の席にゆっくりと近づいていつて、座つた。

「もう～！ 無視するなよ…………な」

俺の様子に気がついたのか、咲はさっきまでの笑顔とは一変して、少し心配そうな顔を俺に近づけて来た。

「どうか……したの？」

俺は返事をしてあげたかったが、喉から声がどうじしても出せなかつた。

俺がそうして黙つているの見ながら、咲はゆっくりと隣の席に座つた。

そして、俺の隣で一言も喋らず、ただ黙つて座つてくれていた。

俺は少し落ち着いて来て、ようやく話すことが出来た。

「さつや……教官に呼び出されただろ？ それでな、なんか国立魔術局の本部のお偉いさんが来てたんだ。それで、今日の俺と咲の試合を見て、俺に向こうに来ないか？ つて……」

そんな感じで、正直意味不明な説明だつたと思つ。

俺はほとんど理解できないであらうと思つたが、咲はそれだけで何かを理解したようだ。

「……それで、進ちゃんは何て答えたの？」

「俺は……何も答えられなかつた」

咲は俺がそつと「やつか……」だけ言って再び黙り込んでしまつた。

「お、俺、どうするべき……だろ」

いつもはこいつの前で一切弱音なんか見せないよう意識していきたのに、今日だけはどうしてもこいつの意見を聞いてみたくなつてしまつた。

「…………」

咲は席を立ち、バッグを取つてからゆづくらジニアの所に向かつて行き、言つた。

「屋上……行こつか?」

屋上へ向かつ途中で会話は一切なかつた。到着した。

屋上から見える外の風景は夕焼けで真っ赤に染まつていた。

俺たちは手すりの手前まで歩いて行つた。

咲はこちらを向かず、外を見ながら言つた。

「行けばいいと思うよ」

「!?

唐突に言つたので、さつきの話の事だと理解するのに数秒かかつた。

だけど理解したとき、俺は少しショックを受けてしまった。

俺は正直、こいつは俺を止めてくれる……止めてくれると思つていた。

「迷つてゐつてことは、行きたい気持ちがあるつてことなんだよね?

俺は返事ができず、咲の言葉に静かに頷いた。

「じゃあ、もしかしたら行かないと後悔するかもしれないじゃない?

?」

「……ああ、そうだな」

「今度は何とか返事をすることができた。

そういうことなんだと思ったからだ。

咲のおかげで自分の考えが少しづつ固まって来ているのかもしない。

「だつたら、行くべきだと思つよ。この学校にいてもたぶん進ちゃんは後悔すると思つから」

確かにそうだ。

たぶんここにいても俺は何も変わらないだろう。

けれど俺には心配なことがあった。

「確かに、進ちゃんを拾ってくれたのはこの学校の学園長だよ。でもね……それで迷つてるんだつたら……」

そうだ。

俺はこの学校の学園長に拾われた。

この学校の費用も寮費も全て学園長が持つてくれていた。

確かにそれは事実だ。

だけど……

「……違う。俺が迷つてるのは別の事だ」

そう言つと、咲は不思議そうな顔をしていた。

「何に……迷つてるの？」

俺は言つづきか迷つたが、ここで言わないこともあらへ一生後悔するだらうと思つて、言つた。

「お前のことだよ」

「え？」

咲は俺の言葉が意外だったのか、驚いた顔をした。

「お前が……心配だ」

「それは……ど、どういう意味で？」

俺は正直これがどんな感情なのかわからなかつた。

ただ、ここで言わないといけない気がした。

「悪い……正直わからねえ。俺が小さい頃からお前はずつと一緒にだ

つたから……。ただ、なんか……」

俺はうまく言葉に表すことができなかつた。

それを見ていた咲はさつきまでの少し緊張した面持ちから少し解けて、笑顔になつて言つた。

「私も、進ちゃんの事が心配だよ。でもね、ここでもし私が引き留めたら、私のために進ちゃんは行かないって言つてしまつ気がするから」

それは……

そうかもしけないな。

こいつが嫌がるんなら俺はおそらくやめていただろう。

「だから、私は…………止めない！」

そう、力強く言つた。

俺の身体のなかから一気に重石《おもし》のようなものがなくなつた感じがした。

「ああ……わかつた。ありがと。ようやく決心がついたよ」

俺がそう言つと、咲は頷いて再び黙つて手すりから外側の景色を見た。

俺はそれを見ていると、唐突に医務室での事を思い出してきた。

確か……

「あ……そついえば……さ。なんか急に腹が減ってきたな……なんて」

俺がそう言つと、咲は身体をビクッとさせた後、顔だけゆっくりとこちらを向けてきた。

「え？」

「いや、俺今日の昼パンと牛乳だけだから……なんかめっちゃ腹減ってるんだよね」

俺がそう言つと何かに思い当たつたのか、咲は顔を急に赤くした

……気がした。

夕焼けのせいだったかもしれないが。

「もしかして……気づいてた？」

「え？ な、何が？」

俺が明らかに動搖しているのを見て、今度は確信したのであらうか、顔を真っ赤にして言った。

「気づいてたんだ……。それなら！ ……いや、いいか」

一人で何かつぶやいた後、決心し、おもむろにカバンの中を漁り、あさ、

畳に持っていた青い弁当箱を出した。

「じゃあ、これどうぞ」

そう言って、俺に渡してきた。

そう、咲が畳に隠していたのはこの弁当箱だったのだ。

俺はこんな言い方をして弁当をもらつたが、実は女子に弁当をもらひのなんてこれが初めてだつたもんだから、少し緊張しながら「お、おう」なんて言いながらもらつていた。

「じゃ、じゃあ、明日洗つて返すよ」

「なに律義なこと言つてるのよ。せつとと食べて弁当箱返して。それ、使うんだから」

そう言われるともうびっくりしようもない。

俺は頷き、風の防げる入口付近に行き弁当箱を開けた。

咲も少し緊張した面持ちで隣で見ていた。

中身はいたつてシンプルなものだつた。

ご飯の上に海苔のりがのつていて、おかずは玉子焼きにワインナーにから揚げにポテトサラダ。

ただ……ワインナーだけは何故かタコなんだつた。

「お前……意外と可愛いとこあんだけな」

「ほつとけ」

そんな感じで会話をしながら弁当をたいらげた。

実際一人ともあまり会話を交わすことはなかつたが、気まずいといつことはなく、ただ心地よかつた。

「ごちそうさま、うまかったよ」

俺がそう言つと、満足そうに頷いた後、カバンの中に弁当箱をし

また。

外はすでに暗くなり始めていた。

「さて、そろそろ行こっか」

咲がおもむろに立ち上がり、そう言った。

「ああ、家まで送つてくよ」

俺はそう言った。

だが「いい」と言って、歩き始めてしまった。

俺も後からついて行つたが、無理強いする気になれず結局帰り道の途中で解散してしまった。

ただ、帰り道はいつもの咲に戻っていたのでいつも通りの会話ができた。

それだけが救いだつたな。

解散した後、俺は今日一日の事を考えながら寮に戻つて行つた。

「明日……大佐に連絡をとひつ

?邂逅と新居

翌日の早朝、俺はすぐにフェイト大佐に連絡を取った。

大佐は俺に、いつこれるか、と尋ねた。

俺が、いつでもいける、と答えると「では今日から来て下さい」と言われたので俺はすぐに準備をした。

学校に電話をかけて教官に休学、もしくは退学をするところを伝えた後、俺はダッシュで研究室に行つた。

国立魔術局。

ここには、この国に存在する全ての”魔術”に関する文献と知識が詰め込まれている。

俺たちはそう習つた。

内部では戦略室や対策室などいろいろと分けられているらしいが、俺はあまり詳しくない。

自分にはあまり関係の無いものだと思つていたから。自分の”弱み”を見ているような気がしていたから。だけど、今日は違つた。

やつと……

初めて人並みに、もしくはもつと違つた形になるかもしねりないが、魔術が使えるかもしないのだ。

国立魔術局本部に隣接している研究室に向かつて行く間、俺は自分の感情が徐々に高まって行くのを止められなかつた。

.....

到着した研究室は、想像していた研究室のおよそ10倍以上の大

きさがあつた。

まあ、実戦用にも作られているので、普通の研究室の大きさのはずがないことは当たり前の事だったんだが。

俺はエントランスゲートでチェックを受けた後、受付の人の指示通りそのまま奥に進んで行つた。

施設の感想は、シンプルな研究施設。

だがさすがは国立魔術局直属の研究施設だ。

内装も万全を期しているのか、どこのフロアも、たとえ廊下でさえ、対魔術用の造りになつていた。

ただじっくりと見ている時間は無いので、そのまま俺は指定された場所へ向かつて行つた。

部屋に着くと、大佐の他に3名の女性と、1名の男性がいた。

「おお、来ましたか、魔道君」

大佐の声に反応して他のメンバーも同時にこちらに振り向く。

「はい、遅くなり申し訳ありません」

「いえいえ、時間きつかりですよ」

そう言つと大佐はメンバーを集め、俺を大佐の方に招いた。

俺は少し緊張しながら近づいて行つた。

……んだが、俺はメンバーに並んでいた一人の女の子を見ると眼を丸くしてしまつた。

「え？……冬月？」

俺の言葉に、ずっと無言だったその少女は頷いた。

「……うん」

「え？……なんで、お前にここに？」

「私……メンバー」

「は？」

俺は冬月の言葉に驚きを隠せず、大佐の方をバツと振り向いた。

そんな俺の反応を見た大佐は満足そうに、うんうん、と頷いていた。

た。

「はい、セツナさんは私たちのメンバーの一人ですよ」

「え？ 何言つてん……言つてるんですか？ 普通の学園生がこんなところで何を……」

「彼女は普通の学園生じゃありませんよ。彼女はあの学校を監視するために配置していた、いわばスペイ……といえば聞こえは悪いですが、スカウト、のようなものです」

「は？」

俺は大佐の今言つた言葉を脳内で反芻しながら考えていた。

え？

なんで。

こいつは普通の学園生で、あのときだつて俺に教授から呼ばれたつて伝えに来ただけで……。

あれ。

普通の学園生がそんなことわざわざ頼まるか？

それに何より……

「あの、冬月、一つ聞いていいか？」

俺の言葉に「クリと頷く。

「あの時にお前、俺が上司に呼ばれたつて言つたよな？ もしかして上司つて……」

俺の質問に冬月はスッヒュイト大佐の方を指さして言つた。

「ん……じょーし」

マジでか。

俺は盛大にため息を吐いた後、あの時の自分の浅はかさに脱力した。

そんな俺の様子を楽しげに見ていた大佐は、もう満足したのだろうか、俺に話しかけてきた。

「はい、これでもう納得していただけましたか？」

「納得したというか……納得せざるをえないという状況ですね」

「ご理解の早い方は助かります。私は優秀な人が好きなものでしてね」

そう言つた後、一つ咳払いをして、話を続けた。

「それでは、まずはメンバーの紹介と……」

「ちょっと待つて！」

大佐がやつとセリフを言おうとした時に、隣にいたもう一人の女性のメンバーがそれを制止した。

「……はあ、どうかしたんですか？ キリカさん」

大佐はやつと話ができる状況になつた時に止められて、やや不快そうだった。

「あたしはさつきも言つた通り反対ですよ！ いきなりこんなどこの馬の骨ともわからないやつと一緒に過^すしていくなんて……」

俺はそのキリカと呼ばれていた女性を見た。

その女性はいかにも気が強そうな感じで、さらに見た目もこの国の女性と言つ感じは微塵もしなかつた。

……つていうか、過^すす？

俺はその言葉に反応したが、言葉を挟む余地はなかつた。
「だから言つたでしょ。この施設で我々が私用に使つていい施設は3つしかないんです。一つは私とセツナさん、もう一つはハヅキさんとカルクさん、となるともう一つは必然的にあなたと魔道君になるじゃありませんか」

俺はツッコミたい言葉を飲み込んで聞きに徹した。

キリカ…………さんは、大佐のその無茶苦茶な論理展開に大げさに反論した。

「だからまずその話がおかしいんです！ なんで全ての部屋が男女混合なんですか？ 普通男子と女子で区別するでしょ。」「ごもっともだ……

俺は心中でキリカさんに賛同を示した。

「ほう、そのような小さい事をキリカさんは気になさるのですか？ あの国からいらしたエージェント、優秀な方だというのに」「なー？」

大佐の言葉にキリカさんはプライドが刺激されたのだろうか、言

葉に詰まっていた。

「それに、あなたの国ではこいつのことは普通なのではありませんか？ 同じ人間なのですから」

「グッ……」

大佐の言葉に押されつつも、最後の力を振り絞つてキリカさんは反論した。

「で、でも……それは数人部屋の話で。それに、男女を分けることが可能というか、分けてほしいという要望が（あたしから）あるわけですし……」

「そうですか…………そうですね。キリカさんは男の人と同じ部屋でいるだけで何かあるような女性だったのですか……。なら、仕方ありませんか」

大佐のその言葉にキリカさんは突然顔を、ポンッと赤く染めた。「な、そ、そんなことあるわけないじゃないですか！ 何を言つてるんですか大佐は！ ……あたしはただ……」

大佐はキリカさんの言葉に同意を表すように頷いた。

「そうですね、キリカさんをこれ以上いじめるのは怖いですし、こ^こは単純に皆さんの意見で決めましょう。ちなみに私はさつきの主張を貢きます」

最後の部分はあれだつたが、大佐の言葉でキリカさんの目がパツと輝いた。

大佐はそれを確認した後、冬月の方に顔を向けた。

「それでは、セツナさんにお尋ねします。あなたはキリカさんと同じ部屋でいいですか？」

冬月は迷うことなく首を横に振った。

「いや」

「なんですよ？」

キリカさんはショックを隠しきれずにそう叫んだ。

「落ち着いて下さい。もう一人女性がいるじゃないですか」

そう言って大佐は宥めた後、もう一人の女性、ハヅキさんの方を

向いた。

「それではハヅキさん、あなたにもお尋ねします。あなたはキリカさんと同じ部屋でいいですか？」

「え？ あ、あの……わたしは……その……」

キリカさんと違い、そのいかにも日本人女性と言つ感じの少女は、ただひたすらにおどおどとしていた。

「はつきりしなさいよ！」

それを見ていたキリカさんはいらっしゃとした感じでそう言い放つていた。

「いや、その……キリカさんが嫌……というわけではないのですが……。やはり私は大佐の方針に従つた方が……」

ハヅキさんはまじめな様子でそう答えた。大佐はそれを聞いて満足そうに言つた。

「はい、では決定ですね」

「いや、待つてよ！ まだ……」

「仕方ありませんね……」

そう言うと大佐は、いつも姿勢がいいのだが、さらにいつも以上に背筋を伸ばして言つた。

「命令です」

その話はそれで終わつた。
恐るべし大佐……。

……じゃなくって、俺、置いてけぼりじゃねえか。

そんな俺の様子に気づいたらしく、カルクと呼ばれていた青年が俺に近づいて来た。

「よ。初めてまして、俺はカルク。君は……魔道進……だつたよな」

「ああ、初めてまして。タメ……かな？ 呼ぶのは名前でいいよ」

俺がそう言うと、カルクは首を振つた。

「いや、まあどうせ大佐がコードネームみたいなものをするからそれで呼ぶよ」

「へ？ そうなのか……」

全員名前っぽいんだが、どうやら本名じゃない人もいるらしい。

大佐……面倒くさい趣味だな。

俺たちが談笑していると、大佐はまた俺の前に近づいて来た。
「さて、今度こそは自己紹介を……と思いましたが、今までだいたい
いわかりましたか？」

「まあ、少しば……」

「そうですね……。でも、あなたにもコードネームを与えないとい
けないので、やはりもう一度ちゃんとしておきましょう。……では、
みなさん自己紹介を。番号の若い順からお願ひします」

そう言つと、冬月さんがまず一步前に踏み出した。

「……………」

その後は順番に全員続いた。

「俺はN〇・〇〇3のカルクだ」

「私はN〇・〇〇4のハヅキです」

「ふん、N〇・〇〇5のキリカよ」

「そして私がN〇・〇〇〇のフュイトです。呼ぶときはフュイトで
も大佐でも」自由に」

そして、全員の自己紹介が終わつた後、大佐は俺の方を見ながら
ぶつぶつと呟いていた。

「魔道進……ですか。魔道は出来るだけ隠した方が良さそうですが、
ススムつていうのもどこか恰好が悪い気がしますね」

そう一通り考え終わつた大佐は一つ咳払いをして俺の方を向いた。
「では、あなたは今日からN〇・〇〇6で、コードネームはシ

ン です」

.....

全員との自己紹介を終えた後、俺は今日から自分が住む部屋に来ていた。

「いや、というか俺、今日からここに住むって今初めて知ったんだけど

俺がそう言うと、隣について来ていたキリカ 大佐曰く、大佐以外の男女間での「コードネームに”さん”を付けるのは禁止らしいは、バカにしたように言った。

「はあ？ あんた何言ってんの？ 大佐が今日からって電話で言つていたの、私も聞いていたわよ」

「…………ああ」

確かに今朝の電話では、今日から、って言つてたけど……そう言う意味だつたのか。

俺はてっきり、今日から学校には一切行かず、毎日通つてくれ、程度に考えていたのだが。

そんなことを考えてる俺をよそに、キリカは先に部屋に入り、自分で置いてあつた荷物を整理し始めた。

「ちょっと待つてよ。……もともとここはあたし一人で住んでいたんだから」

「ああ、もちろん待つよ」

「…………ふん」

文句はぶつぶつというが、手は止めない。

この子はさつき会つた時から思つていたが、とてもしつかりした子みたいだ。

この子とならちゃんと暮らしていくそだな……

……つて、ちょっと待てよ。

「なあ、さつきの話的に、マジでこの部屋に俺たち二人で住むのか？」

決して4人程度住んだとしても狭いわけじゃないほどの大好きな部

屋だつたのだが、やはり男女が同室とこつのはさすがに俺にも抵抗があつた。

作業をしてる手は休めず、キリカは今の俺の声に反応してくれた。
「だから、せつこう決まつたぢやない！ あたしは反対したのに
……反対したのに……」

なんだか落ち込みモードにはいつてしまつたみたいだ。

とりあえず、俺はこの状態をどうにかしようと思い、話し始めた。

「いや、まあ仕方ない……な。大佐はあんな性格のようだし……」

俺がそう言うと、作業をしながら俺の方をキツとキリカは見た。

「もとはと言えばあんたがスカウトなんかされるから……」

そんなむちやくちやな。

ちょっとさつきの印象を修正して、この子はじつかりしてるので、
たまに子供っぽいところがある、にしておこう。

「まあ、こればかりは……」

「ふん。あんた、少しば出来るんでしょうね？ これで役立たずだ
なんて言つたら許さないわよ」

「……俺の事つて、みんな何も聞いてないのか？」

「聞いてないわよ！ 何？ 自慢でもあるつていつの？」

自慢というか……

自虐ならあるんだが。

そつか……まあ言えないわな。

あの人は仮説が嫌いつて言つてたし。

俺は一人で納得していたが、この子がこのままじゃ止まらない氣
がしたので仕方なく話すことにした。

「そうだな。キリカには話しておいた方がいいな。一緒に暮らして
行くわけだし、確實に迷惑を掛けことになると思うから」

「な、なによ……？」

俺のやたら長い前置きに少し引き気味にキリカはなつたが、俺は
構わず続けた。

「俺は、役に立たないよ

「は？」

「だつて……俺は魔具を持つてないから」

「……」

「魔具が無い、ただの無能だ」

「な、なにを……本気で言つてるの？」

思いつきり罵倒してくるかと思つて覚悟していたのだが、キリカがそうしてくる気配は微塵もなかつた。

「なんだ？ もっとバカにしてくると思つていたんだが……」

「バカ、そんなことしないわよ。…………その、悪かつたわね」

ホントに意外だった。

出会つてから印象が何度も変わったかわからなくなつてきた。

まさか、謝られるとはな……

なんでなんだろ？

役に立たなかつたら許さないとか言つていたのに。

「別に、そういう事情だつて知つていたらあんなこと言わなかつたわよ」

「いや、気にはしなくていいんだけど……」

そこから、少しの間沈黙が続いたが、キリカがその沈黙を破つてくれた。

「気分を害しそうなら言つてね、話を止めるから。その……わたしの友人にもいたのよ。凄く優秀なのに親に魔具を与えられなかつた子が……。それで、その子は今、学問の方で頑張っているんだけど……。あなたも似たような境遇なのかなつて思つてね……」

なるほどな。

「どうなんだる？？」

俺の場合は親に魔具を与えられなかつたのか、それとも……

だけど、

「いや、俺の方がずっとマシだよ。俺は親から愛情を注いでもらえたなかつたんじゃなく、注いでもらつ機会そのものが無かつたから。俺は捨て子だ」

「え、あ……」

「このことは全く気にしてないから、キリカも気にしないでくれよ

「…………わかったわ」

俺の言葉にそう返事した後、また無言になり作業を再開した。
俺は自分の荷物が一切今のところ無いので、とりあえず大佐の所に報告に行くことにした。

……

大佐に必要なものなどを告げに行くと、すでに準備を済ませていたようで、いくつかのダンボールを渡された。

それを持ち、部屋に帰つてくると、キリカは丁度作業を終わらせたようで、ふう、と息を吐いていた。

俺は帰りに買つてきたコーヒーをキリカに渡した。

「ほい、お疲れさん」

「…………ありがとう」

そう言ってキリカは缶コーヒーを飲み干した。

「ふう、やつぱこれだー」

「…………おっさんだな」

「つるねひー」

俺のツツコミに対する反応が異常に早かった。
やつぱじこいつは何でも出来るタイプのやつだな。

とか、俺は意味不明な理解をした。

「それじゃ、俺も準備するか」

俺はそう言って、すぐに作業に取り掛かった。

俺の準備しているところを自分のベッドに座つてじっと見ていた
キリカは、突然口を開いた。

「ねえ」

「ん？」

「親がないのって……やっぱりやみしい？」

「何言ってんだ？……親がいたことねえから、わからねえよ

「そう……よね」

「ただ、育てくれた人がいるから、やっぱり寂しくはなかつたかな

」

俺の返答が予想していたもののかはわからなかつたが、反応が薄いことだけは感じられた。

「なんだ。まだ、遠慮してんのか？」

「しないわよ！……って言つても意味ないわね。多少してるわ

「そうか」

まあ、そんなんふうに感じてしまうのならそれはそれで仕方ない。それがキリカの”優しさ”なんだろう。

でも、やっぱり俺は感じた。

キリカとなりうまくやつていける。

「俺、お前で良かつたよ」

「え？」

「お前となりうまく暮らしていくる気がする」

「ちょ、ちょっと……。何、い、いきなり……」

俺の言葉に急に焦り出したキリカは、俯いて赤くなつていた。

俺はそんな彼女に最大限の親しみを込めて言つた。

「だつて、顔（の変化とか）おもしろいし」

あ、囁んだ。

俺の失言に一度硬直した後、今度は違う意味で赤くなり、ブルブルと震え始めた。

「あ

「……？」

「し

「し？」

「し、死ねえ／＼／＼！」

そう言って、俺はベッドから突っ込んできたキリカに思い切り鳩みどりおち尾に蹴りを入れられた。

その時に俺は思つたんだ。

あ、なんかデジヤブ……。

？能力と訓練

「それでは、これより実技訓練に入ります」

開口一番、フェイト大佐は俺たちにこう指示した。

時刻はまだ午前6時。

俺の普段起きる時間帯だ。

「え？あの、俺も……ですか？」

「ええ、もちろんです……と言いたいところですが、あなたはまだ何も知りませんしね」

「はい」

俺は大佐の質問に純粋に答えただけだが、大佐はどうやらそんな返事を望んでいたわけじゃなかつたみたいだ。

それは、大佐の次のセリフを聞いて確信した。

「みなさんにもまだあなたの情報は何も与えていませんが、どうしますか？」

「どうしますか、つて……」

「いえいえ、昨日の内に私からみなさんに情報を与えておいてもよかつたのですが……。それでは個人情報の漏洩になってしまいますしね」

そう言って、大佐は二コ二コ……というかむしろニヤニヤとしていた。

この人、性格悪いな。

「……とりあえず、自分で話せつてことですか？」

「そういうことですね」

理由がよくわからないが、大佐はなにやら楽しそうだった。言つしかないな。

はあ……と軽く息を吐いてから「俺の能力は……」と話を始めようとした時、突然どこからともなく大きな欠伸が聞こえてきた。

「ふわあ……。別に、能力なんて言わなくていいんじゃないの？」

キリカだった。

それを見ていた大佐は笑顔のまま言った。

「ほうほう。それはなぜですか？ キリカさん」

「う、何よその顔は……。別に、能力なんて自分で言わなくともそのうちわかつていくんだし、だいたいあたしだってわざわざ自分の能力なんてばらしたくないわよ」

キリカのそのセリフを聞いた大佐はまるでこうなることがわかつていたかのように、うんうんと頷いた。

「そうですね～。確かにそうですね～。いや、『』もつともな意見をありがとうございます。……いやしかし、そのような意見がまさかキリカさんから出るとは思いませんでしたね。昨日の今日で何がかつたんですか？」

「な、何かつてなによ？」

「例えばですね～。シン君に昨日の夜優しく……」

「死ね！」

大佐がセリフを言い終わる前に、昨日俺にかました攻撃と同じものを大佐に繰り出していた。

だが、大佐はそれをなんなくかわすと、キリカの足を引っ掛けで、キリカを見事に転ばせた。

「 つ！ いつたあ～～！ 避けるな！」

激しく頭から床に転んだキリカは、頭を抑えながら必死に大佐に抗議をしていた。

「 そう言われましても、こ、いきなり襲われましたからね」

「 それは、大佐が……！」

「 どうかしましたか？」

「 くッ！」

「 ……ああ、さっきのセリフ、最後まで言えてませんでしたね。シン君に昨日の夜に優しく 部屋の片づけでも手伝つてもらつたからじゃないですか？ と言おうとしたんですが」

「 へ？」

大佐の言葉を聞いてキリカはしばし硬直。だが、すぐに口を開いた。

「そ、そうね。昨日は中々働いてくれたからね」

「……」「……」

「よし、じゃあそろそろ実技やるかあ～！」

そう言つと、大佐の視線を気にせず実技訓練を行つ施設にそそくさと入つて行つてしまつた。

周りで見ていたカルク達も、苦笑しながらそれに続いて行つた。
「やれやれ、本当に言うことを聞いてくれない人たちですよ」

「……大佐、楽しそうですね」

俺がそう言つと、ニヤツとして言つた。

「いえいえ、苦労ばかりですよ」

.....

他のメンバーたちが実技訓練の施設に入つていつた後、俺は大佐にあるものを渡された。

「大佐」

「はい、なんですか？」

「これはなんですか？」

「? ボールですが」

「いや、それはわかりますが……」

俺は修行をしていた。

なんか白い水晶のようなボールのようなよくわからないものを使つて。

「おや? ああ、何をすればいいのかわからないのですか?」

「まあ..... そう..... ですね」

何をすればいいというか、何故こんなものを渡されたのががわか

らなかつたのだが。

「このボールは通常のものと違い対魔力用のものなんですよ。まあ、言わば”簡易魔具”と言つたところでしょうか」

「へえ〜」

「とにかく、一度見本を見せましょか」

そういうと、おもむろにもう一つそのボールを取り出した。
それを左手の上に乗せると、右手をボールの少し上空にかざし、目を開じた。

大佐が何かを念じるようにすると急にそのボールは光だし、色が少しづつ変化していった。

そして

最終的にそのボールは紫色を示した。

大佐がそつと手を離すと、十秒程度でボールは元の色に戻つた。

「まあ、こんなところでしようか」

ふう、と息を吐いて、そう言つと、ボールを仕舞つた。

「あの、今は……？」

「ボールに魔力を注入したんですよ。ちなみに、ボールの色は私の魔力の属性ですね。私は、空間などの類に干渉する能力ですのでの色になつたというわけです」

空間つて……

反則じゃないのか？

「ちなみに、エレメント、つまり火や水などの属性の時はその色が、空間は今言つた通りで、その他のスキルについてもそれ相応の反応を示します。まあ、それはまた後日」

俺は大佐の説明に頷いた後、言つた。

「では、これに魔力を注入すれば自分の能力の属性がわかるということですか？」

「そういうことですね。あなたは今まで魔力を流す対象が無かつたのですから、こういったことはしたことが無かつたでしょう」

確かにそうだ。

「まあ、とにかく試してみてください。続きを読む魔具を使えばわかるから。」

「まあ、とにかく試してみてください。続きを読む魔具を使えばわかるから。」

「はい」

俺はとりあえずさつき大佐がやつたことを思い出しながら、同じようにした。

白いボールに手をかざし、目を閉じて……

念じる。

いけ！

俺が念じるとさつき大佐が行つた時と同様にボールが輝きだした。よし、成功だ！

俺は心中でガツッポーズをしながら、その変化をじっと眺めていた。

数秒立つと、その光が徐々に薄れていった。
そして、残つたボールの色は……

「え？」

俺は自分の目を疑つた。

あれ？

確かに……

「これは……」

大佐も俺と同じように隣で驚いていた。

「大佐、俺は失敗したんでしょうか？」

俺が何故こんな反応になつたのかは至極単純な理由だ。
出てきたボールの色が……

白だった。

「いえ、そんなことは……確かにさつきの反応は魔力が流れた証拠」

「なら……」

俺はもう一度自分の手に持つたボールを見た。

ボーラーにはやはり変化が無かった。

俺がしばらく唸つていると、今まで同じように考えていた大佐が急に両手をパンと叩いた。

「まあいいでしょ。ひとまず休憩してみなさんの訓練の様子でも見に行きましょうか」

俺はもう少し考えたい気分だったが、みんなの練習風景を見て見たいという欲求もあったので、とりあえず大佐の意見に賛同する事にした。

「わかりました」

「では、その施設に入ってください」

俺は言われるままにその指で指示された施設にまっすぐと歩いて行つた。

俺が先に歩いていると、後ろから大佐の声が聞こえてきた気がした。

まさか、彼と真逆の反応を示すとはね。

.....

「あ!!!!」

激しい砂塵が吹き荒れる。

目の前ではまるで本物の砂漠のようなビジョンが広がっていた。
その中で2人の女性が戦っている。

俺が見ていると、突如炎が現れて一方を飲み込んでいった。

俺はその光景に息を飲む。

攻撃を繰り出したのはキリカだ。

彼女の両腕に付けられたグローブは光輝いていた。

おそらくあれが彼女の魔具なのだろう。

「

攻撃を受けた少女は何の言葉を発するでもなく、ただ当然のよう
にその炎を消した。

少女 セツナは傷一つ負つていなかつた。

それを見たキリカは怒つたように叫んだ！

「もう、あんた2種類も魔術使えるなんてセツニイわよ！ 反則よ、
反則！」

「」

キリカが一方的に言うだけでセツナは何も反応しない。

それを見ていた大佐が外部からマイクを使って中に放送をした。

「いえいえ、それは反則ではないですよ。……ただ彼女には2つ使
えるだけの才能があつた、ただそれだけの事です」

その大佐の声を聞いたキリカはぎょっとしたようにこちら側を振
り向いた。

「げ、大佐、来てたの？」

「ええ、もちろんです」

二人の会話に中々口を出せなかつたが、俺はやはり自分の疑問の
方が勝り、大佐に尋ねていた。

「あの、2つって言うのは……？」

キリカと、楽しく（？）会話していた大佐は俺の方を向いて説明
をしてくれた。

「ああ、セツナさんは2種類の魔力の適性があつたのですよ。水と
氷。片方だけでも十分強力ですが、彼女は両方とも完全にマスター
してますしね」

そう、まるで親のように嬉しい顔をして大佐は語ってくれた。

大佐が説明をしているうちに、砂漠のビジョンの見えるところを
抜けて二人は俺たちの方に来ていた。

「そうなのか。……セツナって凄かつたんだな……」

「そんなこと……ない」

俺の質問に対してもセツナはそう控え目に答えた後、髪飾りを手で
触つた。

そういうえば、教室の時も大事そうにしていたな。
あれがセツナの魔具なのかな？

「綺麗だな」

「……え？」

「むつ」

「ほう」

俺の発言にセツナが驚き、キリカと大佐が順に反応した。
俺は唐突に大佐たちが何を言いたいのかがわかり、すぐに訂正した。

「あ、いや、その髪飾り……」

「……」

みんなその発言に一瞬停止したが、セツナが一番初めに反応してくれた。

「……ありがと」

「いえいえ。……それがセツナの魔具なのか？」

「……そう」

「それ一つだけか？」

「うん」

「そつか」

会話は単調なものだったが、俺たちにとつてはこれが丁度いい感じだった気がする。

気がつくと、大佐が何やら楽しそうに俺たちを見ていた。

「ふふ。キリカさんもあそこに参加しなくていいんですね？」

「な!? なんであたしがそんなことしなくちゃいけないんですか！」

「！」

「いえいえ……いやあ、それにしてもあの一人楽しそうですね~」

「そ、そんなこと……」

俺には二人の会話がよく聞こえなかつたが、なにやらキリカが言い負かされていることだけはわかつた。

……まあいいか。

とりあえず他の一人の訓練も見たいしな。

「よし、じゃあそろそろハヅキとカルクの訓練も見に行つてくるかな」

「……うん、あの一人はあっち」
セツナが指を指した方向を確認して、俺はその方向に向かうこととした。

「んじゅ、大佐、キリカ、俺は他の一人の訓練を見に行つてくるよ」
俺がそう言つと、丁度こちらに歩き出そうとしていたキリカと田があつた。

「え？ あ、ああ、そうね。その方がいいわね」

「？ どうかしたのか？」

「な、なんでもないわよ！ サッさと行きなさい！」

俺はキリカにそう言われ、追い出されるように出て行つた。
な、何なんだよ。

俺が出て行く直前、大佐のため息が聞こえた。

「やれやれ」

.....

次に入つた施設は崖のビジョンの見える場所だった。

まさに断崖絶壁。

その場所には凄い風が吹き荒れていて、氣を抜けばすぐにじばされてしまいそうな錯覚を覚える場所だった。

いや、錯覚では無かつたのかもしれない。

なぜなら、その風を出していたのは他でもない、あのカルクだつたから。

「はあああ！」

カルクの言葉と同時に突風が吹き荒れる。

足元に落ちている砂も木の枝も石も全てが飛んでいく。

そして、そこ出来あがつた小型の”竜巻”が相手 ハヅキを襲う。

ハヅキはその竜巻を避けるように大きく岩の周りを走り回り、力ルクの後方に回り込むと腕を振った。

いや、腕を振ったのではなく、何かを投げたようだ。

あれは……

銀?

俺が疑問に思つた瞬間、その手のひら程度のサイズの銀たちが突然大きくなり、その竜巻を丸ごと飲み込んだ。

いつたい何が起こつたのか俺には全く理解できなかつたが、どうやらハヅキの能力は他の人と異質らしいということだけはわかつた。俺が一人で感心していると、俺に気付いた一人が戦闘を中断した。

「おう、お疲れさん」

「お疲れ様です」

二人がそう言いながら俺に近づいてくる。

「お疲れさま。二人とも凄いな」

「いえいえ、これぐらい、すぐ出来るようになりますよ」

いや、無理だろ……

「ま、ねえさ……ハヅキはともかく、俺レベルにはすぐになれるさ」「そういうものなのか?」

「ああ、そういうもんさ」

……あれ?

今何か結構衝撃的な発言が隠されたような……。

「あのさ……ハヅキとカルクって仲いいよな……。同じ部屋つて言われた時も全く拒否みたいなのが無かつたし。二人つてどういう関係なんだ?」

俺がそう言つと二人とも少し不思議な顔をした後、手をポンツと叩いた。

「ああ、言つてなかつたつけ? 僕たちは正真正銘の姉弟だよ」

横でハヅキがほほ笑みながら頷いている。

俺はそんなこと全く知らなかつたので、ちょっと、ほんのちよつ

とだけビックリして、言つてやつた。

「マジで！？」

二人は俺の声の大きさに驚いていたが、コク「クと頷くと、興奮していだ俺を宥めてくれた。

「な、なるほどな……。どちらかと言えば、恋人同士かと思つてたよ」

「そ、そんなことあるわけないだろ？」

「そ、そんなことあるわけないでしょ？」

俺の何気ない感想に二人は同時に反応してきた。

いや、そんなに焦られた方が困るんだけど……

俺は心中でそんなふうに思いながら、だがそれには触れないよう決意し、笑顔で返答した。

「そうだよな！……で、話は戻るけど、カルクは”風使い”なのか？」

「ああ、まあそんなところだ」

「で、ハヅキは……なんだ？」

俺は今まであんな能力見たことが無かつた。

少なくともエレメント系ではないことだけはわかる。

「私は”物質変化”ですね。私が触れたものは私が望んだ形にすることができます」

「なるほど。……それもかなり凄いですね」

「いえいえ、みなさんのエレメントの能力に比べれば扱いも難しいですし、何もないところから生み出すこともできませんし、大変ですよ」

そう笑いながら答える。

俺は心の中で思つた。

でも、さつきそのエレメントの攻撃を軽くあしらつたのはあなたじゃないですか。

「まあ、姉さんは何を言つても謙遜するから言つても仕方ないよ」カルクが俺にそうフォローを入れてくれたが、それを聞いていたハヅキが急に怒り出した。

「こら、また姉さんつて言つてる。名前じゃなくてコードネームじやないとダメなんでしょう?」

「いや、でも大佐は俺たちは別にいって……」

「そんな、私たちだけ優遇してもらつていては他の方々に示しがつかないでしょ?」

「それは……」

結構二人とも大変そうだな。

それにしても姉弟そろつて優秀とはな。

普通、魔具つていうのは一家に一つつて感じなんだけどな。

「わかったよ。」大佐の命令だからな

「そうね」

二人の名前の問題はそんな感じで解決した。

「そういうえ、二人の魔具つてなんなんだ?」

「ああ、俺はこの小型剣だよ」

そういうと、腰のあたりに指し込んでいた短剣を俺に見せてくれた。

「へえ、なんか、カッコイイな

「だろ?」

俺の質問にそう答えると、さわやかな笑顔を返してくれた。となりにいたハヅキも続いて俺に教えてくれた。

「私はこのイヤリングです」

「あ、それだつたのか。それつて、落ちちゃつたりしないのか?」

「大丈夫ですよ。私の能力は物質の変化ですから。確実に取れないようにしています」

なるほどな。

俺は頭の中に一人の情報をしつかりと書き込んでおいた。

「で、シンの修行の方はどうだったんだ?」

カルクはそう、何気なく俺に尋ねてきた。

「いや、それが……」

俺が良くわからなかつたといつ旨を説明しようとした時、突然大佐の声が研究室に響き渡つた。

『みなさん、政府から要請が入りました。場所は中東のアスベニアです。ただちに私の部屋まで集まつてください』

その放送と同時に今まで俺と話をしていたはずの一人は走り出し、一瞬のうちに目の前から消えた。

え？

何が起こつたんだ？

俺はどうしていいのかわからなかつたが、とにかく一人の後を追つた。

?初陣と銀剣（前書き）

更新が遅れてきて申し訳ありません（汗）
懺悔？もじめて、少しこいつもよつ長めで……。

「本日の日本時間11：00に中東、アスベニアで内紛が起ころました。政府の要請で至急私たちに向かつてほしいと」

中東で？

そんなこと、どうして俺たちに？

俺と同じ疑問をいだく者はだれもいらず、そのまま会話は続いていた。

「今はどんな状態なのでしょうか？」

ハヅキがそう尋ねると、大佐は淡々と答えた。

「現政権に反対する革命派の勢力と、賛成している保守派の勢力の方々が争っている状態ですね。簡単に言つてしまえば貧困層と富裕層の争いです」

「で、俺たちはどうするんだ？」

カルクの当然の疑問に大佐は少し渋い顔をした。

「政府からの要請はこうです。出来る限り民衆を巻き込まないように戦闘を止めてほしいと。……ただ、私たちの命を優先し、いざといふ時には殺害もやむなし……ということです」

「そんな！？」

その言葉に俺は驚きを隠せなかつた。

國が一般人の殺害を認めた……だと？

「以上で私からの説明は終了ですが、何か疑問のある方はいらっしゃいますか？」

大佐のそのセリフに、俺はすぐに反応した。

「た、大佐！ この機関……研究室は実戦訓練を行うための施設だったのでは無かつたのですか？ どうして、実戦を……まして他国の紛争を止めるために動くのですか？」

大佐は考えるそぶりなど一切見せず、すぐに俺に話し始めた。

「簡単なことですよ。ここが政府直属の部隊であり、訓練ではなく、

実戦を行うための施設だからですよ

え？

そ、そんな……。

「そんなこと、俺は一言も……」

「ええ、聞いてないでしょうね。聞いているはずがありません。だつて、あなたは、あの学校の生徒なのですから」「大佐のセリフに一瞬寒気がした。

血が冷たい。

喉が渴ききつている。

「……どういう意味ですか？」

俺はゆっくり、確かめるように尋ねた。

「あの学校もまた、政府直属の機関。要は私たちのように政府の命令で動く、才能のある者を見つけるための施設です」

「！？」

大佐の突然の告白に言葉を失った。
なんで。

「じゃ、じゃあ俺が呼ばれたのって……」

「ええ、その審査を通ったということです」

大佐のその言葉で、俺は学校に大佐が来たときの事を思い出して
いた。

確かに大佐は俺を誘ってくれたけど……

「でも、俺が来るかどうかなんて……」

「わかつていましたよ。あなたのように周りと違うということを自覚している人間は、必ず輪に溶け込めない。つまり、より快適な……自分を必要してくれる場所を求めてしまうものなんです」「そ、それじゃ……大佐が俺を呼んでくれたのは、能力を解析するためじゃなくて……」

「はい、あなたの能力を使うためです」

そんな……

つまりは、そういうことか。

」の施設から出られないように滞在をせしめられているのも、全てそういうことなのか。

俺は身体から力が抜けて、今にも崩れ落ちそうだったが、何とか持ち直すことができた。

今まで黙っていた子たちの声が聞こえてきたからだ。

「……もう、やめてあげて」

「そうよ、冗談にしては言ひすぎよ」

セツナとキリカだつた。

「え、冗談つて……？」

「冗談なんかではありませんよ」

「確かに、事実は冗談ではないのかもしだいけど、大佐のやりたい事は違うでしょ」

キリカのその言葉に、横でセツナも頷いていた。

「どういうことだ？」

「確かに、政府がそういうことをしていることも学校の事も全て事実よ。だけど、ただ一点だけ違うのよ。大佐があんたを呼んだのは好き放題に使うためじゃないわ。あんた……シンを呼んだのはきっと、シンの力が必要だったから」

「…………そう。…………大佐は、そんなことしない。政府の言ひことなんか聞かない」

一人のその言葉を聞いた後、俺は再び大佐の方をゆっくりと向いた。

「やれやれ……そんなに買いかぶられても困りますが」

そう、ため息を吐いてから言った後は、さつきまで俺を見ていた威圧感のある顔ではなく、いつもの皮肉っぽい笑みを見せていた。

「ただ、確かに命令をそのまま聞くわけではありません」

そう言つた後、全員を見渡しながらゆっくりと呼吸をして、言った。

「総員に告ぐ。今回の任務は紛争を確実に止めて見せる事。ただし、民衆には一切傷をつけないことをその義務とする」

「 「 「 「 「了解！」」」

俺以外のみんなは、まるでそれがいつも通りの号令であるかのように、そう返事していた。

……

「それでは、私とシンくんとセツナさんをAグループ、キリカさんとハヅキさんとカルクくんをBグループとして行動します」

俺たちはすでに戦地にたどり着いていて、廃墟の中で作戦会議をしていた。

どうやつてこんなに早く着いたのかつて？

簡単なことだ。

フェイト大佐の能力。

空間移動は基本の基本らしい。

「私たちのグループは改革派の方向へ、キリカさんたちのグループは保守派の方へ向かつてください」

大佐の言葉に全員頷き、すぐに走り出した。

～～Aチームサイド～～

俺たちは改革派の本隊の方向に向かつていた。

セツナも見た目と違つて体力があるらしく、俺たちと大差ないスピードで走つていた。

俺はそれを確認しつつ、だけどただ走るのもあれなので、素朴な疑問を大佐にぶつけることにした。

「大佐。大佐の能力で本陣に一瞬で移動する事は出来ないんですか？」

「可能ですよ。ただこの距離なら、アバウトにだいたいこの辺りというふうに移動するので、命の保証は出来ませんがね」

「……了解」

本陣の建物の中に入つて一斉に狙われたりしたら終わりだな……。俺はその結論に至り、樂をするという考えをすぐに打ち消した。そんな俺たちの掛け合いを隣でちらちらと見ていたセツナは、途中で話に割り込んできた。

「あの……シン」

「ん? なんだ?」

「……咲……田向咲とは連絡を取つていいの?」

珍しいな。

この子がこんなことを聞いてくるなんて。

いや、俺が勝手にそういうタイプだと決めつけていただけか。

「ああ、一応……な。メールがあいつから来てるから夜に2・3通」

「……そう

「それが、どうかしたのか?」

「……ええ」

どういう意図があったのかはわからなかつたが、そこでセツナはもう黙り込んでしまつた。

俺は気にはなつたが、それ以上突つ込まないことにし、走ることに専念した。

目標にたどり着くまでに30分もかからなかつた。

軍の数は前衛にいる武装部隊がざつと見て50、後衛にいる魔術部隊が50というところだつた。

魔術師たちは全員ロープを来ていて、素顔さえ全く見ることが出来なかつた。

「なんで、あの人たちはロープを掛けているんですか?」

俺のそんな問いかけに大佐は迷うことなく答えてくれた。

「なに、単純なことですよ。魔具を見られただけで、相手軍のだいたいの能力がわかる能力を持つている者が存在する、ということだけですよ」

なるほど。

それで、不利にならないようにするためか。

「でも、あの程度透視する能力もあるんじゃないですか？」

「なかなか鋭いところを聞いてきますね。だけどそれは問題ないんです。あのロープは、通過する魔力を感じ取った時に着ている者に何かしらの合図を送ります。つまり、その合図を感じてすぐにその術者を捕まえるように意識していれば、あの人数なら問題ありません」

「了解です。勉強になりました」

「いえいえ」

戦地にも関わらず、こんなふうにあまり緊張もせず俺は言葉を交わしていた。

まあ、俺の場合は戦いを見るだけと言っていたから、それほど深刻さやそういうものが全く分からなかつただけかもしが。

大佐はただ場馴れしているからか。

「それでは、私とセツナさんで実行に移しますので、どのようなものか見ていてください」

そういうと、大佐は即座に走り出した。

もちろん、セツナも後に続く。

大佐たちが部隊の前方にたどり着くと、部隊は急に停止した。

「武器を捨ててください。私は国立魔術局本部から参りました、フエイト大佐です。速やかに武器を捨てれば、投降したと認め、危害を加えないことを約束します」

大佐の声に、革命軍からすぐさま動搖の声が走った。

「魔術局……だと？」

「やばくないか？」

「大丈夫だ、相手はたつたの二人だ」

みなが口々に思い思いの事を言っていた。

だがその声を一蹴するように、リーダーらしき、ロープを着た男が前に出てきて大佐に向かつて行つた。

「私は改革派、革命軍のリーダーであるシェルと申します」

「そう言つた後軽くお辞儀をし、そのまま続けた。

「私どもは変革を望んでこの行為に及んでいます。いくらあなた方でもその権利を止めることなど出来ないと思われますが？」

「確かにあなたの言つとおりです。ですが、それも民衆に被害が出

なければの話です。あなた方が戦地に選んでいるであろうこの先の市街地は多くの一般人の方々がいらっしゃいます。私どもはその方々を守る権利がありますので」

「……」

大佐の声に、何かを考えている様子だつた。

だが、俺の考えた以上に事はあつけなくすんだ。

「わかりました。今日の所は私どもは手を引きましょう。また、戦闘場所についての議論をしたいと思います」

そう言つて、引き返して行つたからだ。

その様子を見えなくなるまで確認した大佐たちは俺の所に戻つてきた。

「説得できたみたいですね。戦闘にならなかつたし、これで今回は解決ですか？」

俺がそう尋ねると、大佐はいつものあの微笑をしながら言つた。

「いえ、これからですよ」

「～～Bチームサイド～～

「今はどうな感じ？」

キリカの問いかけにカルクは「ちょっと待つてくれ」と言つて、耳を澄ました。

彼らはいま、保守派の本拠地であるこの国の拠点、つまり王宮に来ていた。

王宮の敷地の中に忍び込むまでは容易なことだったのだが、そこから中に忍び込むには門番を倒して行かなくてはいけなかつた。

だが、出来るだけ目立つ行為は控えようという結論に至り、現在カルクの能力で会話を少しでも聞きだそうとしているところだつた。

「……改革派は……のようですが」

「ふむ……。保守……リーダー……どう動くつもりだ?」

「私どもは……」

どうやら国王と保守派のリーダーが話し合つてゐるようだ。
会話が少しずつ聞きとれるようになつてきた。

事前に大佐から聞いていた話によると、国王は保守派のリーダーに全幅の信頼を寄せているらしい。

確か、リーダーの名前は……

「ダルよ……この件はお前にすべて任せると、よいな?」
「は、もちろんです。仰せの通りに」

最後にその会話をした後、ダルと呼ばれたリーダーの男が部屋から出て、こちら側に向かつてきているところだつた。

カルクは一人にも気配を出来るだけ消すように指示し、草陰に隠れた。

ダルと呼ばれていた男が門を出た後、彼らは比較的安全そうな場所まで移動し、カルクが状況を説明した。

「どうやらさつき門をくぐつて行つたダルと呼ばれる男、つまり保守派のリーダーに国王は全てを任せているようだ。それで、そのリーダーがどう動くかだが……」

さつきの会話からとりあえずの行き先『アインベルク』という町に行くことだけがわかつた。

その町に保守派の軍を集めてから国王には動くと言つていた。
それにも……

「それにしても、凄い信頼のされ方ね、あのダルつて人。信用つて言つた方がいいのかしら。全てを任せつて、一国の王が簡単に言うことじやないわよ」

カルクの言葉を先取つて、キリカがそう言つた。

「……英雄」

「ん？」

「大佐が言つてたんですよ。あのダルつてお方は英雄つて呼ばれてるって」

ハヅキの言葉にカルクは首を傾げた。

「英雄か。大した名前だな……あいつはいつたい何をしたんだ？」

「王様が殺されかけたときに彼が守つたと伺いましたが……」

「なるほどな。だけど、それだけで英雄にはならないだろ？」

カルクがそう言つたが、ハヅキは迷いなく続けた。

「そこで彼が気に入られて王の軍に入れられたそうです。彼の出た戦闘は全戦全勝だと聞きました」

「……そういうことか」

それならわかるな。

とカルクが呟いた時、黙つて聞いていたキリカが口を開いた。

「でもなんかあたし、あのダルつて男、英雄つて呼ばれる器じやないような気がするんだけど」

「なんでだ？」

「ん……よくわかんないけど」

「そつか。ねえさ……ハヅキはどう思う？」

「そうですね……。ただ、奇妙な話は聞きました」

「奇妙な話？」

「あの男の軍は勝利した後必ず全員が憔悴しきつていいという事。

それと、王が助けられたという事件の後、王の政治が急に悪政になつたということ」

「何だそれ？」

「いえ、私も詳しくは……」

考えるべき事はたくさんありそうだったが、とりあえずこの後の行き先はわかつてないので、そこに行きもう少し見張りうつという結論に至り、アインベルクに向かつて行つた。

～～Aチームサイド～～

『アインベルク』

王宮の近くにあり、要塞ヨハシと化している町だ。

どうやら城が襲われた時にすぐに逃げる事の出来るようになっていたらしい。

対魔術装甲は魔術局と張れるぐらいだとどうとか。

さらに、王宮で管理している騎士団の実に70%を一ひらに配置している。

それでは王が危険なのではという疑問があるかもしないが、転移魔術を使えるものが一人でもいればそんなもの問題ではない、とう考えのようだ。

……というよりも、なんで俺たちがここにいるのかといつ事が気になるだろう。

簡単なことだ。

あの後、城の方向に向けて進んでいる時に、セツナが何気なく言ったんだ。

「要塞……見たい」

「行きましょう！……！」

大佐の反応の早さには驚いたな……。

まあ、後から聞いたら元々こっちに来るつもりだったと言つてたけど。

「で、大佐はここで何をするつもりですか？」

横で要塞と呼ばれる施設を見、目を輝かせ、だけど俺の視線に気づくといつもの雰囲気に戻るということを繰り返しているセツナを置いておいて、俺は大佐に疑問をぶつけていた。

「なあに、ここが要塞の町なら確実にカルク君たちもここに立ち寄るはずだと思つただけですよ」

「それだけ……ですか？」

「はい」

なるほど。

確かにその可能性は高いが……。

さつきの最後の大佐のセリフから、俺はもつと何か凄いことでも起じると思つていたんだが、氣のせいだつたか。

……つて、何言つてんだ。

何も悪いことが起こらないならそれに越したことはないな。

俺は自分がまるで戦いを望んでいるかのような発想を打ち消して、大佐の方を向きなおした。

「それで……あっちのグループと合流するまで動かないつもりですか？」

「いえ。私の推測が正しければ彼らは確実にこちらに向かっているはずなので、先に要塞に突入しましょう」

「……は？」

要塞に突入つて……マジか？

少し離れたところでそれを聞いていたセツナがゆっくりと近づいて来て、俺の隣に立つた。

「セツナ、お前からもなんか言つてやつてくれ

「……行く」

「……」

迷いが無かつた。

さすがは大佐とよく行動しているだけの事はあるな。

俺は軽くため息をついた後、大佐の指示に従うこととした。

「でも、俺まで行くと足手まといになりますか？」

「大丈夫ですよ。私がいますし」

隣でセツナも大佐の言葉に頷いていた。

凄い自信だな。

それで話はとりあえずまとまり、俺たちは要塞の中に突入して行つた。

～～Bチームサイド～～

「　　！」

無言のまま、ある部屋の前に立つていた騎士をキリカが氣絶させた。

それを確認してカルクたちはその部屋に侵入する。
彼らもまた、すでに要塞の中に侵入していた。

この町にたどり着いた彼らは、大佐たちと合流をした方がいいのではないかという話になつた。

だが、大佐たちがこの町についているかを確認するために耳を澄ませていたカルクが奇妙な話を聞いたのだ。

いわく、

「この町に、改革派のやつらが来るらしいぞ」

「なんでだ？ 戦闘をするのか？」

「いや、达尔様と話をするとかなんとか……」

「达尔様と、か……。だが、それもまた妙な話だな。確かにあのお方は先ほど全権を国王様からいただいたようだが、普通はまず国王様に謁見に来ないか？」

「うむう……確かに、要塞であるこの町よりも城に向かう方が安全と言えば安全かもしれないしな」

「　　」

こんな感じの会話だった。

三人は一人目の意見に賛同を示し、この違和感を拭い去るために侵入しようという結論に至つた。

ついでに、カルクの能力でシンの声だけは感知できたしな。

「で、これからどうするつもりなの？」

ハヅキの問いかけにカルクは唸りながら考えていた。

「どうするか……か。キリカはどう動くべきだと思う？」

「あたし？ そうね。やっぱりさつき言った通り达尔ってやつが怪

しことと思うのよね。とつあえず、あこつとヤシで……

「却下だ」

「なんですよー?」

「いや、キリカがサシになる必要性がわからなかつただけだ。ただ、確かにあいつが気になるのはわかる。俺達で直接話に行くか、それとも……」

「改革派のリーダーとの話し合ひを盗み聞くか……ですね?..」

ハヅキの言葉にカルクは頷く。

「現状、もしも俺たちの予感が当たつているんなら、むやみに話し合ひをするのは得策じゃないんだが」

「確かに、そうよね。じゃあ、とにかくあたしたちは……」

コンコン。

キリカの話は、途中で聞こえてきたノックの音に中断させられた。ますい……

全員は顔をすぐに見合わせると、すぐに近くへの身を隠せる場所に移動した。

「誰かいるのか?」

「……」

ゆつくりとドアが開く。

武装をしている兵士が軽く部屋を確認する。

兵士は一か所を見て目を止めた。

「なんだ? こんなものあつたか」

銅像のようなものを見ているようだ。

それはまるで後ろを守るかのように立っていた。後ろには壁しかないのに。

「……まあいいか

そういうと、弊兵士はドアを閉めて出て行つた。

兵士が部屋の前で待機していないかを確認するために数分その場にどじまつた後、誰からともなく出てきた。

「いや、ホントにハヅキがいてたすかつたわ

キリカの言葉にカルクは頷く。

「ホントホント。まさか自分の同僚が銅像になつてるなんて誰も思わないからな」

そう、さつき兵士がみた銅像は、ハヅキの能力でガチガチにコーティングさせた先ほどドアの近くにいた兵士だつたのだ。

「いえ、これぐらいしか能がありませんから。……それに、ここももう危険ですね」

「そうね。どちらにしても、そろそろ改革派のリーダーも来てる頃かもしれないし。行きましょう、ダルのところへ」

.....

「いよいよ実行に移す時が来たか……」

「ああ、すでにあいつは俺の手駒だ。俺の言つ通りに動く」「ようやく俺たちの願いが叶うというわけだ」

その言葉にダルは頷く。

「さて、まずは手始めに王を殺そうか」「そうだな」

改革派のリーダー、シェルと呼ばれていた男も同意の意を示す。キリカは怒りに震えながらその話を聞いていた。

カルクの能力は風を操ること。

二人にも相手の会話を聞かせることは造作もない。

「お前の魔術で王をこちらに呼び寄せてくれ。手は私が下す」「わかった

そういうと、シェルは静かに詠唱を唱え始めた。

シェルの魔具はどうやらあの杖みたいだ。

その杖が大きく輝きだした。

やつは現在、あいつの魔具にとっての唯一の”大魔術”を使おう

としていた。

「もう……無理」

「ま……！」

カルクが引き留めようとしたが、キリカはすでに飛び出して行ってしまった。

「ちつ」

カルクはすぐにハヅキの方に視線を送ると同時に、走り出した。

「！？」

「誰だ！」

キリカ達の出現に驚いたのか、ショルの詠唱が止まった。

「ふん、あんたたちに名乗る価値もないわよ。とにかく、ここにあんたたちを止めさせてもらひわ」

「……なめた口を」

ダルは奥歯を噛みしめた後、部屋いっぱいに響き渡る様な声で指令を出した。

「侵入者だ！　ただちに私の所に来い！」

その場で叫んだだけで、特に回線を使つたというわけではない。

だが、その言葉と同時に一瞬で大量の兵士が集まり、部屋の付近は取り囲まれてしまった。

けれど、兵が集まつたのはあくまで部屋の周りだ。

「考えが甘いな。部屋の外に集めたところで、どうするつもりだ？」

カルクが挑発するようにそう言った。

だが、本当に考えが甘かつたのはカルク達の方だった。

「バカが。この程度の事を想定してないとでも思ったのか！　ここがなぜ要塞と呼ばれているかを思い知れ」

そういうと同時に部屋の周圍にあつた壁が開いた。

気がついた時には、要塞の中心にあつた一つの私室は、まるで大広間のようになっていた。

そして、そこを囲むように外側には多くの兵器が取り付けられて

いた。

「はつ！ 貴様ら程度にやられんわ！ 行け！」

その言葉と同時に周りにいた兵士たちはカルク達を襲った。

「ちつ」

襲い来る剣を身体をしならせてかわしながら、カルクは大きく上に飛び。

そして、大きく腕を横に振り、鋭い風の刃のようなもので兵士たちに攻撃を繰り出した。

だが、どうやら敵の装甲は表にいた兵士と違い、全員魔術に耐性があるようで致命傷にはならなかつた。

兵士たちはその攻撃にも全くひるまず、襲い来る。

「なんだ？ こいつら、なんか変じやないか？」

カルクの言葉に、炎の壁を出していたキリカも頷く。

「ええ、あたしの炎にも全くひるまない！」

ハヅキも鉄の装甲で防御しながら言った。

「まるで、意識がないみたい」

こんな普通の兵士に押されるとは思つていなかつたので、全員に焦りが生じていた。

キリカははひたすら防御をしながら、視線をダルに移した。

「ははははははは、どうだ、私の力は？」

「なにがあんたの力よ！ 兵士の力でしょ？」

「違うな……。まだ気付かないのか？」

まるで勝利を確信し、優越感に浸つているような声でダルは言った。

そう言つたダルの目は 光り輝いていた。

「あんた……まさか」

「そう、私の魔具はこの瞳。私に忠誠を誓つたものを意のままに操る能力だ」

「それじゃあ、こいつらも……」

「ああ、私のしもべ。忠誠を誓つた者たちだ」

なるほど。

これでだいたいの事情は分かつた。

こいつが戦争で無敗だったことも、王の下についていたことも、全てはこのためか。

「さあ、これで終わりだ」

ダルの言葉と同時に、全員が一斉に襲いかかってきた。
それを見たキリカは言った。

「もう……仕方ないわね。 カルク、ハヅキ！ 大魔術を使うわ
よ」

「いや、だがそれじゃあこの人たちの命が……」

「大丈夫よ！ 私の地獄イフリートの大業火なら、中身、神経だけを焼き切ることが出来るわ。動けないよう足だけを封じれば問題ないでしょ？」しばらく詠唱するから、その間に一人で防いでいてちょうどいい

「でも、お前はまだ……！」

「今はそんなこと気にしている場合じゃないでしょ！」

「……くつ！」

カルクは言葉を飲み込み、頷いた。

キリカは目を閉じて、静かに唱え始める。

グローブがいつもより強く輝きだす。

キリカの詠唱している間にハヅキはありつたけの鉄をばらまき、
キリカを保護するような大きな盾を作った。

カルクは少しでも敵の動きを封じるために攻撃を休むことなく繰り返す。

そうしているうちにキリカの詠唱が最終段階に入った。

「……地獄に存在せし火の神よ……この世に存在する火の精の力を借り……この世界に具現し、我の願いを聞きたまえ……」

大きく目を見開いた。

そして、呼び出す。

「地獄の大業火！！！」

その言葉と同時にこの世の者とは思えないほど大きな男が現れた。

体中から湯気が立ちのぼっており、体中が赤い。目を見るだけで死んでしまいそうなほどの迫力だ。

そいつが兵士たちを見た。

意識のない兵士には何の問題もない……はずなのに、兵士たちは震えて近づいてこない。

それを見ながら、イフリートはゆっくりと腕を払った。その瞬間、目の前に並んでいた500人近くの兵士は一瞬のうちに倒れていった。

「なん……だと？」

ダルと改革派のリーダーもまた、震えながらその様子を見ていた。「ふん……どう？　あたしの……力は……。はあはあ……。これで、あんたたちも終わりね」

「ま、待つてくれ！　私はこの男に誘われただけだ！　せ、せめて、命だけは……」

「貴様……」

シェルの裏切りにダルは明らかな怒りを示す。

だが、そんなことは関係なく、仲間割れをしている一人に向けてイフリートは静かに腕を上げた。

「ひいっ！」

「くっ！」

二人は同時に顔を隠した。

カルク達全員が勝利を確信した。

だが、イフリートの腕が振り下ろされることはなかった。
……キリカが先に力尽きてしまったから。

「「キリカ！」」

二人はすぐにキリカのもとに駆け寄る。

身体を引き寄せると、凄い熱だつた。

「ち！　やはりまだイフリートは使いこなせてなかつたか」「とにかく、手当てを！」

そんな二人をよそにダルは、怒りを堪え切れないように叫んだ。

「「こんな屈辱は初めてだ！ 貴様、さつき私を売られたな……？」

「あれはとつせに……」「？」

「ならば私に忠誠を誓え！ 一度としないと」

「……わかつた」

达尔のあまりの迫力に、シェルは思わずそう答えてしまっていたようだ。

これで达尔との契約は完了。

その反応を確認すると同時に、达尔はカルク達の方に向きなおした。

「もう、私は手を抜かないぞ。全力で貴様たちを殺す」

そういうやいなや、短い呪文を唱えると、また眼球が輝きだした。その光に合わせて、さつきイフリートに神経を焼かれたはずの兵士たちが立ち上がる。

「ど、どういうことだ？」

もはや痛みすら関係が無いかのように兵士たちはカルク達のほうへ向いた。

これは……まずい。

カルクは真剣にそう思った。

逃げるだけなら簡単だが、今はキリカの事もある。自分たちが大魔術を使うには圧倒的に時間が足りない……。

そう考えているうちに、兵士たちは先ほどまでは考えられないようなスピードでこちらに向かってきた。

一人で必死にキリ力を守る。

だが、二人の魔力もかなり削られている状態で、攻勢に転ずることは不可能だった。

やられる……！

一人がそう考えた時、目の前から声が聞こえてきた。

そう、シンの声だった。

「よく、頑張ったな」

～～Aチームサイド～～

実は俺たちもダルたちの会話をカルク達と逆側から聞いていた。
そして、キリカが飛び出して行つたとき、俺は言った。

「大佐！ 俺たちも行きましょう！」

「待ちなさい！ 今は彼女たちに任せましょ～」

「何故ですか？ ここであいつらを潰せば終わりでしょう？」

「ダメです。それでは、戦争というものは終わりません。この戦争
を止めるための鍵はなんですか？」

「ダルを潰すことなんじや……？」

俺がそういうと同時に隣にいたセツナが呟いた。

「王に、ダル……裏切つてること……伝える。それと……改革派
下部に……シェル、敵と繋がつてている事……伝える」

「正解です」

確かに、それはそうだけど……。

「だけど、そんなこと俺たちが言つたところで」

「大丈夫ですよ。ちゃんと撮つておきましたから

なんて用意周到な。

「……今から行つて、間に合つんですか？」

「私ともう一人、そうですね、念には念を入れてセツナさんに来て
いただきましょうか。それならどうにか」

「俺は何をすればいいですか？」

「彼女らが危険になつた時に助けてあげて下さい。……これを渡し
ておきます」

渡されたのは、いわゆるレイピアと呼ばれる細長い長剣だつた。

「これは？」

「あなた用に元々開発部に発注しておいた簡易魔具のようなもので
す。もちろん、魔術は使えませんが……。あなたの魔術が何なのか
わかつていなない今、それは関係ありませんしね。桁外れの魔力の量
と、学園最優秀を誇つていた運動神経をもつあなたならきっとそれ

使いこなせるでしょう」「

……俺なら使える。

「あなた専用の剣です」

俺はその言葉を胸に刻み込みながら言った。

「……これに魔力を注入して戦えばいいということですね？」

「そういうことです ですが、出るタイミングだけは間違えないでくださいね。出るタイミングは……」

普通の相手ならキリカ達はまず負けない。

それならそれで万事解決。

俺の出番はない。

だけど、もし彼女たちの実力を上回る敵と出くわした場合、必ずキリカ達の内の誰かが大魔術を使う。

もし、それでも止めきれなかつたとき、

～～合流～～

俺は出る。

一気にキリカ達の手前まで駆けて行つた。

俺はただの魔具が無い無能。

だけど今なら、このレイピアがある今なら 守れる！

キンッ！

兵士の大きな剣とレイピアが交差する。

敵は大剣、こちらは細剣。

普通なら数秒でこちらが折られて終了だ。

だけど、押されない。

むしろこちらの剣が相手の刀身を押していた。

「ハヅキ！ 今のうちにキリカを連れて行ってくれ！ カルク！ 援護を頼む！」

俺の声に一人がすぐに頷く。

ハヅキは近くにあつた先ほどの盾を使い、キリカを守りながら、

要塞から脱出した。

それを確認してほつと一息をしたカルクは、呪文を唱えた。

気がつくと、俺の剣の周りには風が纏われていた。

「これは？」

「レイピアに風を付加した。切れ味は確実に上がってるはずだぜ」

俺はそれを聞くとすぐに敵の近くにいき、相手の剣をめがけてレイピアを振った。

そして、相手の剣を切つていった。

「は！ こりやすげえわ！」

剣を振る速度も上がっていた。

俺はそのあと勢いづき、次々と武器を破壊していった。

10人……50人……100人。

自分でも信じられない速度で動いていた。

後ろで俺を援護していたカルクは口笛を吹いて言った。

「やるねえ。……じゃ、俺も残りの魔力をギリギリまで使わせてもらうわ」

そういうやいなや、自分の魔具を取り出し、その柄を掴みながら、また詠唱に入った。

大魔術を使うような魔力は残っていないはずだが……。

俺はそんなことを一瞬考えたが、それはただの杞憂だったようだ。

カルクは魔具を使った中級魔術を使えるのだ。

カルクが詠唱を終えると、俺のレイピアの刀身が突然3倍ほどの長さになった。

否、刀身が3倍になつたのではなく、刀身から3倍分の風の刃が付加されていた。

俺がそれをふるうと、対魔術の装甲であるはずの防具でさえ、切ることことができた。

「はあ！」

……

俺が最後の一振りをする。

その瞬間、そこにいた兵士たちは全て倒れた。

戦意がなくても、神経を潰されても動いていた兵士たちが全て倒された。

理由は簡単だ。

切つた後に、付加していた風で相手を床から動けなくしているだけ。

俺は兵士たちを軽く見渡した後、ダルたちの元へ向かいながら言った。

「さあ、どうする?」

「クッ……」

俺の言葉にダルは改革派のリーダーの方を向いて言った。

「俺を転移しろ!」

そう言つた途端、すでに忠誠を誓つていた彼は、迷うことなく詠唱を開始した。

「ちツ!」

俺はすぐに走り出した。

すでにワープをするためのホールは形成されつつあった。

普段の俺ならそれに間に合ひつことも、間に合つたといいでじつすることもできなかつただろう。

だけど、今は違う。

カルクのおかげで身体がとても軽いし、何より

俺はそのホールを確認し、そしてそれに近づきながら魔力をレイピアに大きく注ぎ込んだ。

そして、そのホールを

切つた。

「あなた専用の剣です」

つまりはそういうことだ。

俺の魔力が干渉しつる全ての魔術に対してもレイピアは有効な

のだ。

俺の行動を見た後、今度こそ本当にダルは投降した。

……

「いやあ、今日はお手柄でしたね～シン君」

研究所に戻り、その中に何故かあった酒場で飲みながら俺たちは話していた。

「いえいえ、カルクにもかなり手伝つてもらいましたし、そもそもキリカが弱らしてくれていなければ何も出来ませんでしたよ」

俺は本当にそう思つていたし、それでよかつた。

「そうですか～。らしいですよ、キリカさん？」

「ふん、当然でしょ！」

どうやらもう熱は引いたらしく、一緒に楽しんでいたキリカは大佐の言葉に少しムツとしながら答えた。

「当然ですか～。他の皆さん方はいかがでしたか？」

大佐の言葉にカルク達が順番に応える。

「いや、今回はマジで助かつたぜ！ もしシンが来なかつたら、間違いなく俺たちのどちらかもキリカみたいになつてたからな～

「う～」

「そうね。私もキリカさんみたいに倒れてた可能性は十分にあり得ましたわ。ありがとうございます、シン」

「ぐつ～」

二人の言葉にダメージを受けていたキリカは、セツナのちょっとした言葉でK.Oしてしまった。

「シンは頑張った」

涙目になりながら、キリカはぶつぶつと咳きだした。

「あ、あたしだって、あたしだって……」

俺はそれを見て、キリカに近づいて言つた。

「わかつてゐよ。みんなだつてわざと言つてゐんだから、それぐら
いで落ち込むなよ」

「え？ そ、そくな…………ふ、ふん。そんなのわかつてたわよ
！」

キリカのこの言葉で、またみんなが爆笑の渦に巻き込まれていっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0033x/>

無能の魔具使い

2011年10月9日03時16分発行